

新婚女性における原家族での体験と夫婦関係 ——ミニチュアジェノグラムを用いた探索的研究——

金 子 有 紗

新婚女性における原家族での体験と夫婦関係

—ミニチュアジェノグラムを用いた探索的研究—

金子 有 紗

本研究は、ミニチュアを用いたジェノグラムという新しい方法によって、新婚女性の家族イメージを主観的にとらえようとする探索的研究であった。この方法により協力者から自然な語りを得ることができ、家族イメージ、自己イメージの変化や原家族での体験と夫婦関係に関して調査することが可能となった。

家族イメージ、自己イメージの変化に関しては、協力者それぞれについて考察を行い、協力者各々の家族がその当時に置かれた文脈、家族の歴史とともに、家族成員それぞれ、あるいは家族全体として変化していくそのプロセスをミニチュアと語りの両方から捉えることができた。さらに、原家族での体験から夫婦関係にもちこまれるものを、調査結果から具体例をあげ、明らかにすることができたといえる。そして最後に、このミニチュアを用いたジェノグラムという方法について、その利点、可能性を本調査結果から考察を行う。

I 章. 背景と目的

1. 背景

①家族、結婚をめぐる現状

現代、我が国では晩婚化・少子化・核家族化などがしばしばマスコミによってとりあげられ、その問題について議論されている。家族を取り巻く社会的文脈は急速に変化し、家族はその影響を多分にうけている。家族を理解するためには、現代家族のあらゆる質的变化をしっかりとらえていかなければならないだろう。

婚姻に関しては、晩婚化が進行していく一方で、結婚する意思をもつ未婚者の割合は、9割弱と依然として高い水準にある（人口問題研究所、2011）。結婚の具体的な利点としては「自分の子どもや家族をもてる」が第1位にあげられており、「精神的安らぎの場が得られる」がそれにつづいている。また、実際結婚した夫婦に対する調査で、結婚のきっかけをたずねると、25歳までは「子どもができた」ことをあげる夫婦が50%だが、25歳以上では「年齢的に適当な時期だと感じた」ことが半数を超える。しかし、実際に結婚した夫婦は生活の中でさまざまな問題に直面する。それぞれの背景からくる価値観の相違に困惑することも珍しくなく、子どもはもつのかもたないのか、家庭と育児のバランスはどうとるのかなど、夫婦が解決しなければならない問題は数限りなく存在するだろう。夫婦関係の継続が可能になるように問題を解決することが出来ないとき、離婚という選択が生じる。日本における離婚件数の年次推移をみると、1988年以降その数は増加傾向となり、2002年に29万組と最高の離婚件数となった。その後、減少に転じたものの、2011年度は、結婚件数が66万件に対し、離婚件数は23.5万件である。これは、6万9千～8万4千組を推移していた1950、60年代から比較すると約3倍となっている。近年、「バツイチ」という言葉が使われるようになり、離婚はごく一部の人のだけに関係のある特殊な問題ではなく、誰にとつ

も身近な問題になってきたといっても過言ではないだろう。

②心理臨床実践における家族

家族に焦点をあて行う援助に家族療法がある。家族療法は、1950、60年代アメリカの各地で合同面接が試みられ始め、家族全体をひとまとまりにとらえる臨床的アプローチとして誕生した。初期の家族療法は、家族全員を集めて行う心理療法であったが、近年では、必ずしも全員集めることを必要としない、合同家族面接に固執しない家族療法が実施されるようになってきている（中釜，2008）。

家族療法では、家族をシステムとして捉え、家族の構造、家族の機能、家族の発達を考え、家族や家族の中に生じる問題を理解しようとする。ここでいう、家族の構造とは家族システムの家族成員の数や父親、母親など家族の構成員をさす。家族の構造を理解するための鍵概念として、境界、連合がある。境界とは、家族システムやサブシステムを区切るための抽象的概念であり、家族成員がどのように相互作用するかによって規定され、また連合とは、三者関係の中で、残りの一人に対抗してできる共同戦線のことをさすが、健康な安定した家族とは、両親連合がサブシステムをなし、子どもたちの同胞サブシステムとの間に明瞭な境界がある家族であるといわれている（布柴，2008）。そして、家族の機能とは家族のコミュニケーションや役割パターンをさす。さらに家族は、時間の流れとともに構造や機能を変化させ、またそれぞれの家族成員の発達にともない、家族システムとしても発達していくと捉えることができるだろう。

また、岡堂（1992）は、こうした家族システムの特徴として以下の7つをあげている。

- i. 家族は、複数の個人が相互に結びつき構成するシステムである。
- ii. 患者やクライアントと呼ばれる人（identified patient: IP）は、病める家族システムのSOS信号である。
- iii. 家族内部には、夫婦、親子、きょうだいな

どのサブシステムがある。

- iv. サブシステムの構造化に応じて、勢力の配分と階層ができる。
- v. 家族内では個人の自立性に諸段階がある。
- vi. 家族内の相互作用、コミュニケーションには、独特の構造と過程とがある。
- vii. 家族システムは、時間の経過に伴って変化するが、その過程には諸段階がある。

③心理臨床実践における夫婦

夫婦に焦点を当て行う援助としてカップルカウンセリングがある。カップルカウンセリングとは、夫と妻（もしくは心理的、性的に親密な関係にある二人組）を支援するための専門活動である。実際の援助では、彼らが自分たちの関係をめぐる問題に対して自己決定し、その自己決定にふさわしい言動がとれるよう、援助してゆく（中釜，2007）。複数のカップルカウンセリングのメタ分析を行ったDunn & Schwebel（1995）は、援助者の依って立つ理論の違いによらず、カップルカウンセリングに効果があることを示した。しかし日本では、カップルカウンセリングは専門家にとってまだなじみの薄い領域であるといえる。なぜならば、カップルが関係の改善のために時間と費用を投入するという発想そのものが、日本人にとってたいへん新しいものであり（中釜，2006・野末，2006）、またその背景には、日本の家族が、横の関係（夫婦関係）より縦の関係（親子関係）を中心に機能してきたことが考えられる。そしてこれまで、夫婦関係が問題となるのは、子どもの不適応や症状が明白になった後であり、そうでない場合は、心理的援助の対象になりにくいと思われがちであった（中釜，2007）。しかし、近年はカップル関係そのものを充実させたいというニーズをもって、専門的援助を求めてくる人々が日本においても増えてきている（亀口，2000・中釜，2001）。

しかし、カップルの問題は非常にデリケートで複雑なものだけに、的確な理解と有効な援助には、単一の視点や理論にとどまらない統合的

な視点とアプローチが必要であると野末(2004)は述べている。そして、夫婦それぞれ個人として理解する個人心理の次元、影響を与え合う二者システムとして理解する家族システムの次元、より大きな社会システムとの関わりを考える社会およびジェンダーの次元の3つをあげ、夫婦の統合的な理解と援助について述べている。

④結婚後の原家族との関係

異なる背景をもった個人である夫婦が、夫婦としての関係を築いていくうえで、取り組むべき課題は数多く存在するが、その取り組むべき重要な課題のひとつに原家族から離脱し、新たな家族との絆を深めていくことがあげられるだろう。岡堂(1992)も、Rhodes(1977)や1980年にCater & McGoldrickが提示した家族発達段階論のモデルを検討し、新婚期(婚礼から第一子誕生までの時期)の主要課題として、「夫と妻の双方がそれぞれの出生家族(生まれ育った家族)から、物理的にも心理的にも離れて、ふたりの世界をつくり始めること」をあげている。そしてさらに、この時期に生じる典型的な問題として、発達の前段階で未解決だった問題を、知らず知らずに新婚生活に持ち込むこと、配偶者との関係と出生家族との関係の間でうまくバランスがとれないことの2つをあげている。司法統計(2008)においても、調停原因として「家族・親族との折り合いが悪い」が男性の第三位にランクインしており(女性では8位)、夫婦を考えるうえで、原家族との関係は決して欠くことのできない重要なテーマであるといえる。

夫婦は、2人の関係に限っていえば夫であり、妻であるが、実家との関係でいえば、息子や娘でもあり、重層的な役割を担っているといえる。そうしたなかで夫婦は、心理的・情緒的レベルにおいて、双方の原家族をはじめとする大家族システムの影響を大きくうけている(Carter & McGoldrick, 1999)といえる。そうした場合、カウンセリング場面においては、幼少

期からの家族との関係についても取り扱っていくことで、家族の問題が現在の夫婦関係にどのような影響を及ぼしているのかを理解し、親子関係の問題と夫婦の問題を区別していく必要があるだろう。

また、ボーエン(Bowen, 1978)は、自己分化という概念を用いて、原家族との連続性を保ち、両親など家族メンバーとの絆を保ちながらも、自分らしくいられることが重要であると述べた。そして、それがある程度達成できれば、自分とは異なる他者とも、親密な関係を築いていけることが期待されるという。しかし、原家族からの自己分化は容易なことではなく、ときに融合や情緒的遮断という問題を生じる。融合とは、親からの承認や支持を過度に気にし、激しい怒りや憎しみの感情をもち続け、成人しても原家族と適度な距離を保つことが難しい状態をいう。また、情緒的遮断とは、親から離れて物理的にも情緒的にも交流しないことで、情緒的に巻き込まれないように努めることをいう。しかし、関係を切ったからといってもともとあった葛藤が解決したわけではないため、原家族以外のところで新たな融合関係をつくることになりがちであるといえるだろう。

夫婦それぞれが原家族の中で体験したこと、多世代にわたる家族過程の中で伝達されてきた葛藤や人間関係のパターンといったことがパートナーや子どもをどのように認知し、何を期待し、どのような関係を築くのか、どのような葛藤や問題を生じるのかに深く関わっている(野末, 2004)。

⑤結婚前後の夫婦に関する研究

カップルカウンセリングの先進諸国では、結婚後の夫婦の不和や離別の原因は、二人の関係の非常に早い時期に存在することが指摘されており(Larson & Olson, 1989)、関係改善のカウンセリングだけでなく、結婚前カウンセリングというセラピーも行われている。また、不和や離別などの危険性のあるハイリスクカップルを結婚前に識別するためのアセスメント尺度の開

発もすすめられてきた。アメリカにおいては、PREPARE (Olson, 1996) をはじめとしてさまざまな尺度が開発され、日本においても、吉川 (2008) が結婚レディネス査定尺度の開発を試みている。

その他我が国で結婚前後の夫婦を取り扱った研究では、妻は結婚後のデメリットを夫よりも強く感じ (伊月ら, 2003), また妻の夫婦関係満足度は結婚後、低下の一途をたどるが夫の夫婦関係満足度は変わらない (柏木・平山, 2003) といった妻と夫の意識にさまざまな乖離がみられることが指摘されている。

⑥家族を理解するための方法

家族観の多様化が進んで久しい現代にあっても、伝統的家族観からの束縛などによって、家族に関することに特有の語りにくさが存在する (中坪ら, 2006)。そして、それぞれのユニークな個性をもった存在として家族を理解するには、家族の包括的な理解が欠かせないだろう。そのためのツールがこれまでにいくつか開発され、利用されてきた。質問紙法では、FACES-III、投影法では、家族ロールシャッハ・テスト、図式法では、ジェノグラムや、家族関係図式投影法、などがある。この他にも家族を理解するためのツールは存在し (例えば秋丸・亀口 (1988) による家族イメージ法FITなど)、また、個人についての検査や、個人によるさまざまな表現からも、家族についてアセスメントすることは可能である。例えば、TATには家族関係が投影されるような図版が含まれているし、SCT (文章完成法) にも家族に関する刺激語が含まれている。ここでは、家族のアセスメントを直接意図した方法として、ジェノグラムについて簡単に説明する。ジェノグラムは、家族メンバーの家系図のことをさし、多世代派の家族療法家たちが積極的に用いた家族アセスメントの道具でもあり、治療のための技法でもある。夫婦それぞれの両親、夫婦、子どもたちにわたる3世代の歴史を、基本的に家族全員でたどり、図式化される (大熊, 1992)。性別や年齢、結婚年や、

離婚年の他にも、家族間の関係性や問題、症状なども書き込むことができる。そうして、さまざまな情報を視覚化して作成することで、作成しながら世代間に共通するパターンや、テーマの理解を促すきっかけにもなりうるものである。

⑦ミニチュアを用いたジェノグラム

本研究では、Eliana Gil (2013) のプレイジェノグラムからヒントを得て、ミニチュアを用いたジェノグラムの作成という方法を試みる。その具体的手続きについては、II章-3調査方法で詳しく述べる。本研究で、この方法を用いる理由の1つには、調査協力者への負担を減らすことがある。調査を目的とした場面において、子どもの頃から、現在に至るまでの家族を振り返り、語るという作業には大きな負担があることが推測される。そのため、ミニチュアを用いて家系図のうえに置くという、比較的簡単な作業を用いることで、協力者が調査にあたって感じる、語りにくさ、抵抗、負担が低減されたと考えた。

また、もう一つの理由として、家族関係を把握するためには、明確に言語化された家族関係だけでなく、非言語的あるいはイメージ的な家族関係も重要 (柴崎ら, 2001) であり、本調査の目的である、主観的な家族体験というデータを得るのみならず、家族イメージの表現を調査協力者と調査者の間で視覚的に共有することができるという点からこの方法が適していると考えた。

2. 目的

本研究では、夫婦なりの家族文化が形成されている途上にあると考えられる結婚2年未満の女性を対象とし、女性が家族体験を通して妻となっていく過程を、ミニチュアジェノグラムを用いて主観的に捉えようとするものである。家族の中に生まれた子どもが成長し、結婚することによって妻となっていくプロセスをたどりながら①原家族イメージ、自己イメージの変化を捉え②原家族から夫婦関係に持ち込まれるものについて考察する。また、この方法による調査

は、全く新しい試みであるため、本調査結果から③ミニチュアジェノグラムという方法の利点、可能性について明らかにする。

II章. 方 法

1. 調査協力者

結婚2年未満の女性6人を対象とした。

2. 調査期間および実施場所

2014年7月から10月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせたため、調査協力者の自宅、実家、調査者の自宅において他に人がいない状況で行った。

3. 調査方法

ミニチュアを用いたジェノグラムの作成とそれを元にしたインタビュー調査を行った。

①ミニチュアジェノグラム作成の手続き

調査の概要の説明をした後、調査協力書、録音・撮影同意書を取り交わした。調査協力書には、調査のおおまな内容、個人情報への配慮等を明記した。同意の得られた協力者にはフェイスシートへの記入をお願いした。その後、画用紙に〈子どもの頃〉の同居家族メンバーのジェノグラムを協力者自身で書いてもらい、同意を得られた協力者にICレコーダーで録音を開始した。ミニチュアを置いてもらう際には以下のように教示した。

教示：「自分と自分の家族のそれぞれの人に対して、自分のもっている考えや感じている気持ちを一番びったりと表しているミニチュアを選んで、今書いた家系図の上ののせてください。まず、子どものころの家族のイメージでつくってください」

完成した事を確認し、写真を撮った後、作成したものについて説明をもとめた。説明が終わったら、「もしこのとき、家族以外に自分にとって重要だと思う人や、ものがあれば足してください」と教示し、何か置かれた場合には説明を促した。この手順を繰り返し、〈子どもの頃〉〈中学生時代〉〈結婚が決まったとき〉〈現在〉の家族のイメージでの作成を行った。

②質問段階

〈現在〉までジェノグラムの作成と説明が終わった後、以下の質問をして調査を終了した。

- ・感想
- ・置きたかったものは他にあったか
- ・結婚したことで家族との関係に変化があったか
- ・今の夫を結婚相手に選んだ理由

III章. 結 果

1. 協力者プロフィール

調査協力者の女性のプロフィールをフェイスシートを元にまとめた。データはすべて調査時のものである。すべての協力者が原家族と別居である。

表1 協力者のプロフィール

	年齢	同居期間	婚姻期間	実家を出た年齢
A	27歳	3y4m	1y4m	19歳
B	28歳	1y8m	1y8m	26歳
C	28歳	4m	4m	27歳
D	27歳	1y6m	1y6m	26歳
E	29歳	10m	11m	21歳
F	27歳	8m	10m	20歳

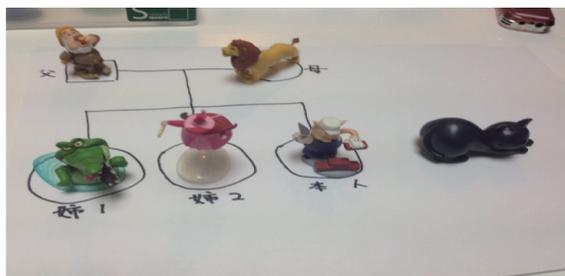


図1-1 A子どもの頃ジェノグラム

(父) おとぼけ小人 (母) ライオン (姉1) ワニ (姉2) 妖精 (自分) 3匹の子豚※レングの子



図1-2 A中学時代ジェノグラム

(父) クロエラ※101匹わんちゃん悪役 (母) ライオン (姉1) クリケット※ピノキオ (姉2) ハートの女王 (自分) ピノキオ



図1-3 A婚約時ジェノグラム

(母) トリトン王 (姉1) おすまし猫 (姉2) ハートの女王 (自分) ティンカーベル (夫) くま

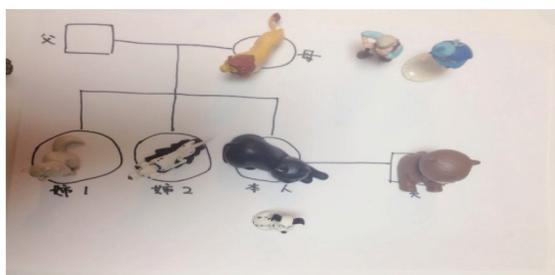


図1-4 A現在ジェノラム

(母) ライオン (姉1) おすまし猫 (姉2) 101匹わんちゃん父犬 (自分) 猫 (夫) くま (おなかの子ども) 101匹わんちゃん子犬 (祖父) ゼペットじいさん※ピノキオ (祖母) 妖精

表3-1 Bミニチュア作成時の語り

	家族イメージ	自己イメージ	家族以外
子どもの頃	小学校低学年頃をイメージして置かれた。父は「のんびり」「穏やか」と説明し、おじさんのミニチュアが置かれた。母は「好奇心が旺盛」とアリスが置かれた。兄は「特徴がない」「ごく一般的な長男」とそれ以上説明されず、妹は赤ちゃんが置かれ「おまけみたいなイメージ」と説明した。	のんびりしている	
中学時代	「同じだと思うものは変えなくていいのか」といった質問がなされ、兄と妹だけ変えられ、父母と自分はそのままであった。兄は、うさぎからピーターパンになり、反抗期で「自由になった」と説明し、妹は「しっかりしているっまいから」とライオンの子どもが置かれた。	変化なし	なし
婚約時	父と兄だけ変えられた。父は結婚に対して「すごうれしそうだった」「うかっていた」と笑顔のミニチュアが置かれた。兄は、社会人になり「落ち着いたので」と、ひつじがおかれた。	変化なし	
現在	兄弟以外がすべて変えられた。父親はライオンになり、「遠くで見守ってくれている」と話した。母親はアリエルになり、「子育ても終わって」「自由に拍車がかかって」と説明された。	夫に比べて自分がけっこう破天荒だったんだと気がついた	夫 規律に厳しく、まじめなタイプ。正義感が強く、社会に反したことが許せない

表3-2 B作成終了後のインタビュー

感想	悪役ほどじゃなく、厳しい人が多かった。それがあれば、母と妹のところに置いた。
の実変関家化係と	親は結婚生活がうまくいくように、味方をしてくれている。結婚生活がうまくいくような、サポートしてくれる。
決結理由	この人とだったら家族として生活できる。自分がしっかりしてないところを補ってくれると思った。(経済的に)今より苦勞することはないと思った。



図2-1 B子どもの頃ジェノグラム

(父) ミスター・スミー※ピーターパン (母) アリス (兄) うさぎ
(自分) くま (妹) カキの赤ちゃん※不思議の国のアリス



図2-2 B中学時代ジェノグラム

(兄) ピーターパン (妹) 子ライオン



図2-3 B婚約時ジェノグラム

(父) 赤い飛行機 (兄) 羊 (自分) くま



図2-4 B現在ジェノグラム

(父) ライオン (母) アリエル (自分) ピーターパン (夫) トリトン王

表4-1 Cミニチュア作成時の語り

	家族イメージ	自己イメージ	家族以外
子どもの頃	小学生時代をイメージして作成した。つくりながら、どこに何を置くかを発話しながらミニチュアを選んでいった。姉は「馬が好きだから」、ママは「ピンクが好きでかわいいから」、パパは「スタイルが似ているから」と外見的イメージの説明がされた。調査者から「見た目以外のイメージがもしあれば」と促すと、パパは「優しい」ママは「明るい」姉は「動物が好き」。	お姫さまでかわいいからアリエルにした。明るかったかな	父方祖母 母方祖母 母の兄弟夫婦
中学時代	家族イメージが変わらないとミニチュアは変更されなかった。	変化なし	
婚約時	姉とのエピソードがしばらく語られた。姉は、長年付き合った彼氏と別れてしまったのに妹が結婚して、「アンハッピーな感じ」で「おすましている」。ママは、結婚の当初反対していたということから、「ちょっとじわるな感じ」にした。父親は、その反対していた母を、説得する力かけをしてくれたことから「ちょっと戦った感じ」にした。	結婚するからお姫様	夫 義両親 義姉夫婦 とその子ども 義兄
現在	最初「変わらない」と言いながら姉以外をすべて変えた。完成時には、「なんかすっきりした」と感想を述べた。父は「なんか急に年とった」「疲れている感じ」がすると、最近父と会った時のエピソードなどが語れた。本人が実家に帰省した際の母親からの対応の変化から「フェアにみてくれるようになった」と感じており、(私に)会うとき「楽しそう」。	すごく楽しい感じ。ルンルンはしゃいでる。	夫 いつもはいいって言うてる感じ。なんか落ち着かないんだけど、私といると元気になるって思ってくれてる。

表4-2 C作成終了後のインタビュー

感想	夫の両親の大切さ、姉、両親に対して自身が心配しているということに気がついた。
の実変関家化係と	夫との家の居心地の良さが上がり、実家での居心地の良さが下がった。実家に帰っても、自分の家に帰るんだ、とういことを意識するようになった
決結理由 め婚たを	自分がハッピーでいられるから。夫がまじめで優しく、夫の家族も好きだから

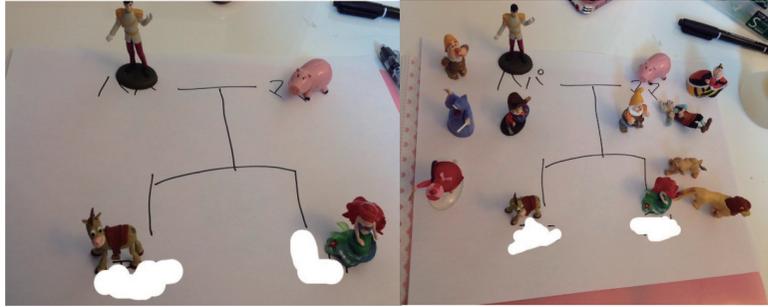


図3-1 C子どもの頃ジェノグラム

(父) シンデレラの王子 (母) ピンクの豚 (姉) 馬 (自分) アリエル

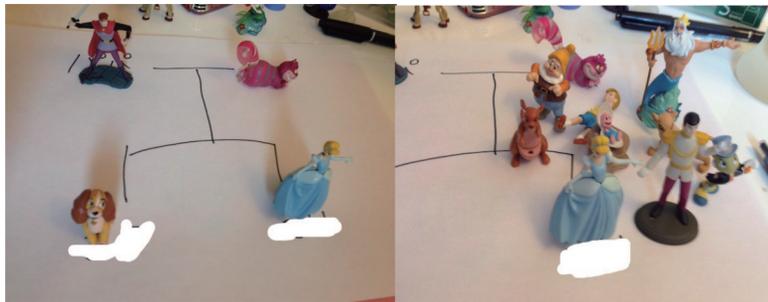


図3-2 C婚約時ジェノグラム

(父) 眠れる森の美女の王子 (母) チェシャ猫※不思議の国のアリス (姉) レディ※わんわん物語 (自分) シンデレラ (夫) シンデレラ王子

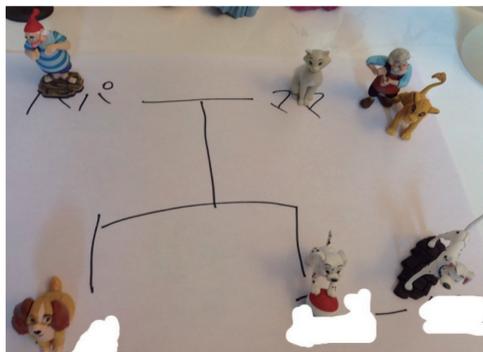


図3-3 C現在ジェノグラム

(父) ミスター・スミー (母) おすまし猫 (自分) 101匹わんちゃん子犬 (夫) 101匹わんちゃん父犬

表5-1 Dミニチュア作成時の語り

家族イメージ	自己イメージ	家族以外
子ども頃の頃 「顔で選ぶの？イメージ？」と質問あり、自分が思う印象でよいことを伝えた。10歳ころイメージして作成した。父は、「一番強くて」「絶対」「でかい」「厳しい」「怖い」。母は、「優しくチャーミング」。弟は、「みんなの顔色みてうまいこと(世の中を)わたっている」「みんなから愛されている」「可愛がられている」。	お調子もので弟とは違う種類にしたかったのだから。このミニチュアみたいな顔で笑ってた	
中学時代 父親は「強い」「怖い」「大黒柱」と述べたあと「でも頼りがいがある」。母は、「いい意味でこの人みたいな感じ」「守ってくれている」「うるさいんだけど、自分のこと、家族のこと気にしてくれている」。弟は、小学生になり、「無邪気」「子どもらしい」「生意気」。	かわいらしく、いい子ぶっているけれども、ちょっと犇猛な自分もいた。	部活(とそのコーチ) 神の領域 絶対 圧倒的
婚約時 父は「今までは、百獣の王的な絶対的存在だったのが、親の弱いところがみえてきた」と説明し、「丸くなった」「優しくなった」と述べた。しかし、このふくろうのように「目を閉じてはなくて、ちゃんとこちのこと見てる」と家族の方に向けながら話した。母は、「優しい」「みんなのことを見ている」、結婚に関してうまくいように父に力かけをしてくれたとあって、魔法使いが、魔法をかけるように父のミニチュアのまわりで、動かした。弟は「嘘もつく」大人になって「ちょっと悪いこともする」けど、「人当たりはいい」。	ずっと気になって、ようやくそのときが来たと思ってこのミニチュアを選んだ。結婚が決まって人生勝った！みたいなイヤな感じ。腹黒い部分が渦巻いているのにポーズだけかわいい。	夫 強い タフ 男らしい 守ってくれそう 信頼感がある、頼りがいがある
現在 父は「完全に丸まった」「すごく優しくなった」「優しいおじいちゃんになりそう」と語った。母は「相変わらずみんなを見ている」「優しい」「子どもも思い」と説明した。弟は、さらに大人になって少しふけたけど、「すっとぼけた感じ」「世渡り上手」だけど「愛嬌はあるから嫌われない」。	あいかわらず、カワイコぶっている。おしゃべりしようとしているけど、腹黒い部分が足元から出てしまっている。	夫 結婚前とイメージ変わった。家庭を守ろうと戦う姿勢がある。愛をもって私を正してくれる 父方祖母 ニコニコ赤ちゃんみたい 母が面倒をみていてそれをみて父が優しくなっている

表5-2 D作成終了後のインタビュー

感想	イメージを表すことが難しかった。作成時は、その時々思い出、情景、その当時住んでいた家を思い出してミニチュアを選んだ。
の実変関家化係と	仲良くなった。みんなが優しくなれるようになった。自分がその家の人間ではないから、お互いに期を使えるようになった。
決結理由婚めを	彼と家族になりたいと思った。今までの家族とは違う、パートナーとして自分だけの家族がほしいと思った。絶対的な立場がほしいかった

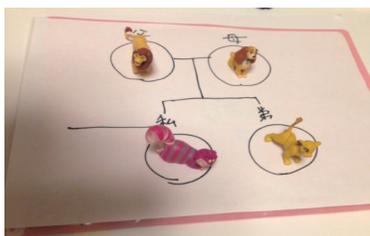


図4-1 D子どもの頃ジェノグラム
(父) ライオン (母) レディ※わんわん物語
(自分) チェシャ猫 (弟) 子ライオン

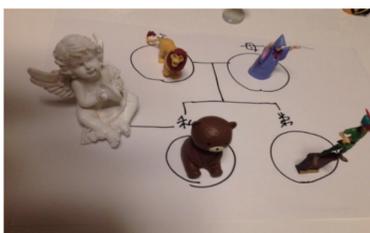


図4-2 D中学時代ジェノグラム
(母) フェアリーゴッドマザー※シンデレラ魔法使い
(自分) くま (弟) ピーターパン (部活) 天使の像



図4-3 D婚約時ジェノグラム
(父) ふくろう (自分) アースラ※リトルマー
メイド悪役 (弟) ピノキオ (夫) トリトン王

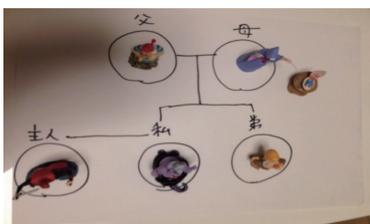


図4-4 D現在ジェノグラム
(父) ミスター・スミー (弟) おとぼけ小人 (夫)
ねむれる森の美女の王子 (祖母) カキのあかちゃん
※不思議の国のアリス

表6-1 Eミニチュア作成時の語り

	家族イメージ	自己イメージ	家族以外
子どもの頃	<p>教示に対して、5個下の弟がいるときということで5歳ころをイメージして作成した。作成時は、「誰を何に」ということが発話されながら置かれた。父は、「仕事をすごくして」「働いている」イメージ。母は、父があまり家にいないので「守る」「強い」イメージ。弟は、生まれたばかりで「未確認生物」「傷つけちゃだめだけどなを考えているからわからない」と説明された。</p>	<p>自由に遊びまわっている</p>	<p>同年代の子たち 同じマンションに住んでいて遊んでた 机 父がつくってくれたものでいつもそこにいた</p>
中学時代	<p>父や母と自分が大人になって話せるようになったことで、「本当はお父さんが一番強くて」「お母さんが家を守っていて」それによって「家が成り立っている」というのを理解しはじめたことが語られた。弟は、小学生になって、話ができるようになったことで「仲間じゃないか」と気がついた。</p>	<p>相変わらず自由だったので犬にしたけれども、ちょっと色気づいてということで女の子のわんちゃんした。</p>	<p>部活の仲間 30人くらいいて、わいわいしてた。いろんな子がいるなあと思った</p>
婚約時	<p>父母のミニチュアは変えず、説明においても「あんまりイメージが変わらず、しかし「自分が家庭をもつておもたらすごいな」と思い、それもあり「強いイメージ」であった。弟も、自分と同じ時期に結婚が決まり、「この人(弟)もお父さんのようになったらいいな」と思ったという。</p>	<p>(母のところに置いたライオンの)小さいのがあれば自分のところにおきたかった。弟が父のようになれたらいいと思うのと同様に私もお母さんのような人になれたらいいな。</p>	<p>夫 同じわんちゃんだ。共感できるかも 夫と出会った家 友人たち</p>
現在	<p>家族のイメージに変化がなくミニチュアは変更されなかった。</p>	<p>母親を目指しているんだけど全然、近づけずにいて、夫にすつとぼけた子だなど思われているんだろうなと思いつながらも、がんばろうという感じ。</p>	<p>夫 結婚して怖いところとかストックなところが見えてきたけど、優しいんだなっていう、優しいときとこわいときがある。(以前と同じ) 友人たち 出合いの場が自分の家になった 夫の友人 夫の気持ちを説明してくれる</p>

表6-2 E作成終了後のインタビュー

感想	<p>自分の考えが、ミニチュアを使うことによって再確認できて楽しかった。当時どうであったか思い出しながら選んだので時間がかかった</p>
決断理由	<p>フィーリングと人柄。信頼できる人だと思った</p>

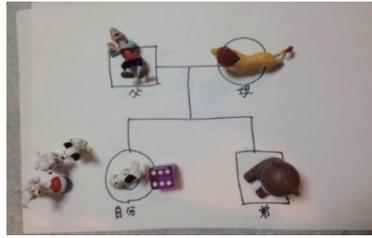


図5-1 E子どもの頃ジェノグラム

(父)ゼベットじいさん※ピノキオ(母)ライオン(自分)101匹わんちゃん子犬(弟)くま(友達)101匹わんちゃん子犬達(机)サイコロ



図5-2 E中学時代ジェノグラム

(父)ライオン(母)メスライオン(自分)レディ※わんわん物語(弟)101匹わんちゃん子犬(友達)ピンクの豚 ハートの女王 おすまし猫 カンガルー親子 チェシャ猫 双子の一人※不思議の国のアリス



図5-3 E婚約時ジェノグラム

(弟)子ライオン(夫)おす犬(友達)おすまし猫 チェシャ猫 101匹わんちゃん子犬2匹(家)タージマハル



図5-4 E現在ジェノグラム

(自分)おとぼけ小人(夫)ザーク※トイストーリー悪役・トリトン王(家)笑顔のおうち(夫の友人)ザズー※ライオンキング

表7-1 Fミニチュア作成時の語り

	家族イメージ	自己イメージ	その他
子どもの頃	6才のころの家族がイメージして置かれた。「姉が思い当たらない」と話し、選ぶのに躊躇した。父は、「気性の変わらない」「穏やか」「とにかく優しい」「見守る」。母は、「子育てにほんとに命をかけてきている感じ」「子どもたちの面倒をみている映像しか思い浮かばない」。姉は「憧れていて、姉が欲しがるものが欲しくなったというエピソードともに、「好きだけど怖い」「上下関係」が強く、「何をやっても負ける」。	よくわからない。家族の中では自分はまっけつとした。はっきりしない性格だった。	祖母 孫に甘いけど母にサバサバ 複雑な顔をしていたイメージ 両親 共働きで祖母が保育園にお迎えにくる
中学時代	イメージの変化はなかった		
婚約時	改まった結婚の報告ではなく、自然な流れで結婚を家族に伝えたというエピソードが語られた。父は「なにも印象が変わらない」、ミニチュアの表情を見ながら「ほんとにこの顔で」「動かず、見守り、何かあったときだけでくる」。母は「いろいろ心配ごとはるだろうけども、あんまりうるさく言うタイプではない」。姉は「結婚の前後くらいは、なんか兄弟だなと思った」「昔は超怖かったけど」「仲良くて、その当時は姉とよく話したエピソードが語られ「自分とおねえちゃんをセット感あると試みてみた」。	一大事っぽい流れで結婚を報告できないタイプ。自分が結婚することによって自分が子であることをなんとなく思った。親側の目線で置いたかも	
現在	両親は「まるで変わらない」「本人たちはけっこう変わったのかもしれないけど、その変わった様子を見せない」と言い、そういったところが「自分の親らしい」と話した。姉は、変わらず、最近も姉が声をかけて家族で会うというエピソードが話された。	自分変えるの忘れた。キャラクター性は変わらないが、夫と二人の家庭と実家の感じにギャップがある。実家にいるとただの娘。家に戻ると主婦。今その狭間にいる	夫 性格的にライオンだけど、自分の両親と比較して大人のライオンではないなと思った

表7-2 F作成終了後のインタビュー

感想	両親の目線を意識しているということを実感した。両親を頼りにして、自分は子どもだと思っていることを作りながら思った。姉がしつくりくるものが置けなかった
の実変関家化係と	実家に帰ったときに「あなたには自分の家があるんだから」といった理由で、帰られるようになったと感じる。それに自分がついていけないかもしれない。
決結理由婚めを	趣味がだいたい一緒できが合う。夫は人を見抜く力があるから、自分をびつくりするぐらい早くわかってもらえる。

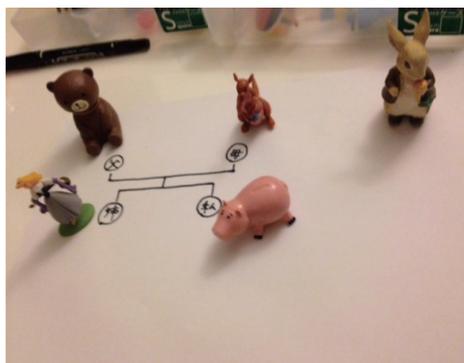


図6-1 F子どもの頃ジェノグラム

(父) くま (母) カンガルー親子 (姉) 眠れる森の美女 (自分) ピンクの豚

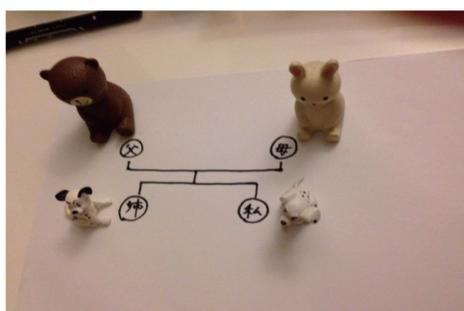


図6-2 F婚約時ジェノグラム

(母) うさぎ (姉) 101匹わんちゃん子犬 (自分) 101匹わんちゃん子犬

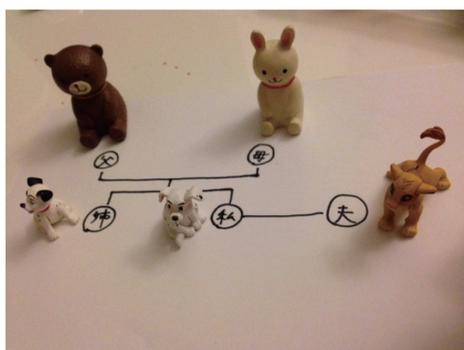


図6-3 F現在ジェノグラム

(夫) 子ライオン

IV章. 考 察

1. 家族イメージの変化と自己イメージの変化のプロセス

ミニチュアを用いたジェノグラムの作成と語りから、家族イメージの変化と自己イメージの変化に焦点をあて、協力者それぞれの事例について考察した。

※「 」は協力者が用いた言葉である。

①Aにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

父は「まぬけ」といった表現が用いられ、女性のキャラクターが置かれるなど、威厳をもった父親像ではなかった様子であった。しかし「優しくて仲良し」や「いい夫、いい父親ではないことがわかった」と言いながらも笑いを交えながら話す様子からAが父に対して親しみをもっていたことが伺えた。離婚した母は、ライオンからトリトン王へと「強さ」や「厳しい」といったイメージを一層強め、この当時、母親としてだけでなく、父親役割も担うようになっていたことが推測できる。

そうした中で一番上の姉は「よき理解者」として、「面倒を見てくれる」存在であり、父親役割を担っていた母親に代わって母性的関わりをAともっていたと考えられる。その一方で、二番目の姉は「なんでもできる」「優等生」と褒めながらも、Aとの衝突も多かったことが語られ、置かれたミニチュアも悪役であったことから、Aは二番目の姉に対して葛藤があったように思われる。自身の説明において「勉強ができた」「こわいものなし」といった二番目の姉と類似した言葉が用いられるなど、二番目の姉はAにとってライバルのような存在だったことが推測される。

A自身は、厳しい母とよき理解者である一番目の姉のもとで「よくできる」「優等生」の二番目の姉と衝突しながら、上手くやってきた自分というイメージを結婚前までもっていたよう

である。しかし、<婚約時>には、そんな自分を「わがままだったかも」と振り返るようになり、結婚によって「のんびりした」「あまり役にたっていない」といった、それまでの説明とは少し異なった説明がなされた。新しいパートナーとの関係の中で、できない自分という側面に目を向けるようになったことがうかがえる。そうした自己イメージの変化とともに、ライバルとして衝突してきた2番目の姉のイメージも大きく変化し、<現在>では「仲良し」であり「優雅そう」と述べ、2番目の姉と少し距離をおき、その存在を認められるようになったと考えられる。

また、Aは「電話がかかってくるのが怖くて」と一時は、厳しい母親を敬遠していたことを説明時に語っていたが、結婚によってその関係性に少し変化が見られ、母親はトリトン王からまたライオンへと戻っている。説明では「最近は接しやすくなった」といったことのみ語られたが、質問段階において「自分の中で母のイメージがかたまっていないので難しかった」と話した。そのことから、母との関係性は、変化の途上にあることがうかがえ、現在は「関係性がよくわからない」状態としてAには認知されているように思われる。

Aは、結婚によってこれまで育ってきた家の外に、「理解してくれる」「頼りにできる」夫ができると同時に、今度は、自身が夫や生まれてくる子どもをケアする側としての役割をもちはじめたことが、夫に対して「手がかかる」といった表現や、おなかの子どもを子犬として自分の前に置いたことなどから感じられた。

②Bにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

<子ども時代>、<中学時代>のジェノグラムは「穏やか」で「のんびりした」と説明され、おじさんが置かれた父と、「自由で」「好奇心旺盛」な少女が置かれた母のもとで、きょうだいはそれぞれの成長とともに変化していく様子が見られる。しかし、B自身は、変化がなく「の

んびりしている」と説明されたくまが置かれたままであった。

ところが、結婚を期に自身は「ピーターパン」と大きな変化をみせた。Bの夫には、トリトン王が置かれ「厳しく」「まじめ」「正義感が強く社会に反したことが許せない」と説明され、夫は彼女の家族の中にこれまでなかった要素もっている人物と認知されていることがうかがえる。トリトン王を置いた点からも、彼女にとって夫という存在の大きさも感じられる。そして、夫との関係の中で、自身の「破天荒」である部分が意識されるようになったことで、「特徴のない」と説明した時の兄と同じ種類のくまから、「反抗期」の兄として置いたピーターパンへと自己イメージに大きな変化が生じたと考えられる。

また、＜現在＞ではB自身の自己イメージの変化と同時に両親のイメージにも変化が生じている。Bは夫との夫婦関係において自身が、これまで自由だと感じてきた母親のような立場になったことが推察され、「破天荒」である自身から見て、さらに自由である母親をアリスからアリエルに代え、またそのパートナーとしての父が「穏やか」なだけでなく、「遠くで見守ってくれる」存在ということへ目が向けられるようになり、父親としての地位が結婚後、改めて意識化されるようになったと考えられる。

③Cにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

父親は、＜子どもの頃＞＜中学時代＞では王子様であり、＜婚約時＞も剣を持った王子が置かれるなど理想的な男性像としての役割もっていたように思われる。そのことが、＜婚約時＞の夫に、＜子ども時代＞に父として置いた王子と同じミニチュアを用いたことからもうかがえる。また、＜子どもの頃＞の母は「ピンクが好き」「かわいい」といった女性らしさを感じさせる印象をもっており、両親それぞれが、男性役割、女性役割を分担してもっていたように思われる。

そして＜婚約時＞からCは、姉がCの結婚に対して複雑な心境を抱いていたことを感じており、その当時のジェノグラムでは、王子様である父とお姫様である自分、それに対し、結婚に反対する少しいじわるな母、複雑な姉、といった構図が見受けられる。結婚というテーマをめぐって、父と娘が連合を形成し、母あるいは姉との間に境界が築かれているようにも見受けられる。

しかし、実際に結婚した＜現在＞では、その家族の構造に変化が生じている。それまで王子様であった父にはおじさんが置かれ、「疲れている」「急に年をとった」といった印象へと変化し、家を出たことによって、＜婚約時＞に連合を組んでいたように見受けられた父親と距離をおき、離れた視点にたつて父を認識するようになったと感じられる。一方で、＜婚約時＞にいじわるな存在であった母は、同じ妻という役割になったCを「フェアにみてくれるように」なり、その関係性が、同じ妻として同志のような関係へと変化した様子が見受けられ、＜婚約時＞に対立していた様子は現在のジェノグラムからは見られない。

また＜現在＞でC自身は、それまでの守られているお姫さまから夫と同じ種類の子犬へと変化した。夫には、成犬を置いていることから自身が守られケアされる側であるという印象を、実家を出た現在も自身に対してもっていることがうかがえるが、これまでのお姫様から脱し犬を置いた点に注目すると、これまでとは少し異なる自身の役割をCが自身に対して、感じはじめていると推測できる。

④Dにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

父は＜子どもの頃＞＜中学時代＞において「強い」「絶対」「怖い」「頼りがいがある」といライオンが置かれ、威厳のある父親像であったことがうかがえる。一方で、母親は「優しく」「見守ってくれている」存在であり、それは＜子どもの頃＞から＜現在＞に至るまで一貫して

いる。弟は成長とともに、ミニチュアが変化していくが「生意気」「嘘もつく」「ちょっと悪いこともする」と若干、皮肉をまじえながらも「人当たりがいい」「まわりから愛される」「嫌われない」といったことが必ずつけ加えられ、弟のそうした側面に関してDが若干の羨望を感じているようにも見受けられた。〈子どもの頃〉〈中学時代〉の説明をする際に、常に自身の説明よりも常に弟の説明が優先され、家族内において自身を弟よりも一歩下がった存在として認知しているようにも感じられた（他の協力者では、説明順序はきょうだいは年齢が上のものから説明されることがほとんどであった）。

自己イメージでは、〈子どもの頃〉は、なかなか説明が言葉にならなかった様子が見られたが、〈中学時代〉では「ちょっと獍猛な自分もいた」と思春期の心情を語る一方で、置かれたミニチュアは「かわいらしい」くまであった。そして〈婚約時〉には、自己イメージを「かわいらしい」くまから悪役に変え、「かわいこぶっているけど腹黒い」と説明し、そのミニチュアを見ながら何度も「まさにこれ」と語っていた。しかし、「そんな自分」を守り、正してくれる夫が横に置かれており、パートナーとしてそうした夫への信頼があるが故に、Cは自身を悪役として置いたように感じられた。

〈婚約時〉には、父親イメージも大きく変わっている。それをDは「親の弱いところがみえてきた」と説明しており、「優しいおじいちゃんになりそう」と父親の役割が、威厳をもった強い父親像から、優しい祖父としての役割へと変化していくように認知しているようである。「丸くなった」父親に対して、〈婚約時〉のDの夫はトリトン王が置かれており、「強い」「頼りがいがある」と〈子ども時代〉の父親の説明時と同じ言葉が用いられ、理想の男性像を担う人物が父から夫へと移ったように思われる。

また、〈現在〉では両親がDの結婚を期に同居することとなった母方の祖母がおかれ「一生懸命面倒をみている母をみて、父が優しくなっている」と少し離れた視点から、現在の家族、

両親の関係性をみているように感じられた。

⑤Eにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

〈子どもの頃〉の父親は、「働いている」イメージが先行しており、家族の中での父親の立ち位置をE自身がよくわからないでいる様子であった。〈中学時代〉から両親の見方が変わり、家族の中での両親の地位が明確化されたようにみられ、両親のミニチュアはそれ以降変化していない。「本当はお父さんが一番強くて、お母さんが家を守っていて」とEは説明し、父と母はずっとライオンのオスとメスが置かれ、Eにとって理想的な夫婦像のモデルにもなっていたように見受けられる。それは、同時期に結婚する弟に対して「父のようになれば」と言い、また自身の〈婚約時〉に「母のようになれば」と説明した言葉からも同様に感じられる。

そして、〈婚約時〉は、ライオンの家族として置かれた原家族に対して、自身と夫は「同じわんちゃん」として両者が犬として置かれている。その全体像から、両親を理想的モデルとしながらも、原家族から抜け、新たなパートナーとの家庭を築いていこうとするEの夫婦イメージが見受けられる。

また、自己イメージでは、〈婚約時〉まで置かれていた犬が、〈現在〉ではとぼけた小人へと変化し、結婚によって自身のイメージが大きく変化したことがうかがえる。「母親を目指しているけど、全然近づけずにいる」と〈婚約時〉のイメージとは異なる自身の側面を感じている様子である。そうした自身のイメージの変化と同時に夫のイメージも大きく変化している。夫にはロボットとトリトン王の2人が置かれ、夫がどのような人物であるのか未だまとまらずに、「優しいとき」と「こわいとき」と2つのミニチュアを置いたことがうかがえる。また、家族以外の大切な人として「夫の気持ちを説明してくれる友人」を間に置き、〈現在〉はそんな夫への理解を深めようとしている様子が見受けられる。

⑥Fにおける家族イメージの変化と自己イメージの変化

父は「穏やか」「優しい」「見守る」といった印象で最初にくまが置かれ、それは最後まで変わらなかった。母親は、〈子どもの頃〉は、「一生懸命世話してくれる」存在であり、大人になってからは、父と一緒に、何も言わずに、しかしFを見守ってくれる人物として存在していたことが、Fの語りからうかがえた。

姉は、子どものころは「憧れ」があるが「何をやっても負ける」「好きだけど怖い」といった両価的な感情をもっていたことが見受けられる。ミニチュアを選ぶ際にも迷い、質問段階においても「じっくりくるものがなかった。」と話していることから姉に対するFの葛藤的な感情が感じられる。しかし、〈婚約時〉には同じ子犬が置かれ、それまで漠然と抱いていた葛藤が少しおさまり、姉と自分を「セットである」と話し、姉妹としての関係を意識するようになったことが語られている。この時の両親に対しても「セット」という言葉が用いられており、〈婚約時〉のジェノグラムからは、両親が連合として機能し、さらに子ども2人も姉妹として連合が組みられるようになり、その世代間に境界がしっかりと築かれているように見受けられる。

自己イメージでは、〈子どもの頃〉は姉と比較して、なんだか「よくわからない」自分であったが、〈婚約時〉に「自分が子である」こと、「姉妹である」ことを意識化するようになり、家族内で自身のポジションをしっかりと認識するようになったと推察される。〈婚約時〉と〈現在〉では、ミニチュアは変えていなかったが、説明時に今は、「夫と二人の家庭」の自分、「実家」の自分の狭間にいる、といったことが語られ、そこには「大きなギャップ」があり、実家を離れ、夫という新たなパートナーと関係を築いていくうえでの、自己イメージの揺れを感じている様子であった。

夫は、「性格的に」ライオンという威厳のあるイメージであるが、「両親と比較して大人のライオンではない」と話すように、結婚したF

にとって、未だ両親は大きな存在であるために、夫は未熟なライオンであり、自身も子犬であるように感じられる。

2. 原家族から夫婦関係に持ち込まれるもの

本研究の調査結果から、原家族での体験や認知が、どのように夫婦という関係の中に持ち込まれるのかについて考察を行った。

①親イメージ

今回、父を理想的な男性像として認識している様子がいくつか見受けられた。例えば、Cは〈子どもの頃〉の父と〈婚約時〉の夫に同じミニチュアを置いており、またDは「強い」「頼りがいがある」と〈子どもの頃〉の父と〈婚約時〉の夫に同じ言葉を用いてミニチュアを選択した理由を説明した。さらに、この両者は〈現在〉、つまり実際に夫との夫婦関係がはじまると父親のイメージが大きく変化する。Cは王子様が置かれていた父に、おじさんを置き「急に年とった」「疲れている感じ」、Dはそれまでの威厳のある父親像が一変し、「丸まった」「優しくなった」と話した。このように、理想的な男性像としての父に対する認知が、結婚という時期になり、夫に対して向けられるようになったこと、またその一方で、父親は娘の理想の男性像としての役割を終えたかのように印象が変化したことがうかがえる。

また、両親の関係を夫婦としての理想的なモデルとしている認識している様子も見受けられた。例えば、Eは父母にライオンのオスとメスを置き「自分もそうなれたらいい」と話し、自分と夫は、ライオンの代わりに犬のオスとメスを置き、両親の夫婦関係を〈婚約時〉に自分たちのモデルとしている様子がみられる。またFは、現在の夫と自分を子どものライオンと子犬として置き、その理由として、結婚したことで子どもであることを再認識したこと、両親と比較して自分たちが未熟であると感じたことが述べられており、両親を意識し、自分と夫が夫婦としてまだ「子」であるにとらえていることが

うかがえた。

②原家族とは異なるかたちで自分を受け入れてくれるという期待

本調査では、結婚を期に女性の自己イメージがそれまでのものと大きく変化していることが大きな特徴の一つである。これまでの家族とは違う、新たな家族との関係の中で、自身の新しい側面を発見すると同時に、それを受け入れてくれる夫の存在といった様子がいたるところに見受けられる。例えばAは、結婚前までは、うまくやってきた自分という自己イメージを強くもっていたようであったが、結婚後は「寝てばかり、のんびり」と自己イメージが変化し、その背景には、それを受け入れ、理解してくれる夫の存在がうかがえる。また、Dは、それまでのかわいらしいキャラクターを悪役に変化させ、戦う王子を夫に置いた。そして、自分に置いた悪役をさして「こんな自分なのに守ろうと、正してくれようとしてくれる」と夫イメージを語り、「かわいい」くまではない悪役としての彼女も受け入れてくれる夫の存在があるからこそ、自身が悪役として表現されているように見受けられる。さらに、Eは現在において「母親を目指しているけれども、全然近づけず」として、とぼけた小人を置いている。しかし、「夫はとぼけた子だと思っているんだろうな」と語っており、〈婚約時〉に想像していた自分とは違った自身の姿を感じながらも、夫がそれを受け入れてくれている様子がうかがえた。また、AやFは質問段階において、結婚を決めた理由として「自身を理解してくれるから」ということをあげており、こうした点からも、原家族とは違ったかたちであったとしても自身を理解し受け入れてくれる、という夫の役割の比重が大きいことがうかがえる。

3. ミニチュアを用いたジェノグラムを用いる利点、可能性

①語りやすさ

本調査では、出来上がったジェノグラムに対

してこちら側は「説明してください」とだけの促しをただけであった。それにも関わらず、すべての協力者がその教示に対して質問をすることなくスムーズに話した。「家族の話をしてください」と質問をした際に予想される抵抗は、調査者側からは感じられず、笑いを交えながら語る場面が多かった。

説明では、ミニチュアを選択した理由だけにとどまることはなく、家族メンバーのパーソナリティに関すること、自分や他の家族との関係性について、家族全体がその当時おかれた状況やエピソードなどさまざまな語りを得ることが出来た。その内容はあくまで家族の中で、あるいは自分にとって、その人物がどうであったかに焦点が置かれ、「どこに住んでいて」「父はどんな仕事をしていて」といったデモグラフィックな情報に焦点が置かれることはなかった。よって、抵抗が少なく、内的な家族イメージの語りを得る手段として本調査方法は有用であるように思われる。

②作成することでの気づき

質問段階で本調査を行った感想を尋ねた際、「家族に対して気になっていたことに気がついた」「自分が考えていたことがミニチュアを使ったことで確認できた」「自分がどんな視点をもっているのかを自覚した」といった、作成したことで得られた気づきが語られた。また、調査中に、協力者が自身の作成したジェノグラム全体を改めて眺める様子が何度かみられ、家族に対する自己認知や自身に対するイメージを視覚的に体験していることがうかがえた。この方法は、これまで漠然と抱いていたイメージを視覚的に捉えなおし、明瞭化し、それによって作成者の内省を促すツールとして機能するといえる。

③言語化されない表現

ジェノグラム作成時に「このキャラクターはどのような性格だったか（何に出てくる誰だったか）」という質問が何度かあったように、置

かれたミニチュアの背景にある性格や物語が意識されて選択されており、説明時に言語化されることのない要素も作成されたジェノグラムに含まれていたことは間違いないだろう。

さらに、ミニチュアの選択という点だけでなく、置かれた向きにも注目することができる。例えば、Aは〈婚約時〉までは、他の家族と同様に自分を正面から見てやや左を向くように置いているが、結婚した〈現在〉では自身のミニチュアだけを、夫側に向けている。また、Fも同じミニチュアを使用しながら、〈婚約時〉では前を向いていたミニチュアが〈現在〉では夫側を向くように置かれている。さらに、協力者の中には、説明時にミニチュアをもって向きを変えながら話す者もみられ、Dは夫が「自分に対していろいろ直せよと言ってくれる」と語る際に、夫のミニチュアを自分の方に向け、Cも「父が母を説得して」と話した際に、父親のミニチュアの向きを母の方へ向け変えた。今回の調査で、同じライオンを5人の協力者が使用したが、その置かれる向きは協力者によって異なり、ミニチュアの置かれた向きにも作成者の内的イメージが反映されていることが推察できるだろう。

このようにこの調査方法では、ジェノグラム作成者の語りからだけでなく、意識化、言語化されることのない側面に関する情報も得ることができるといえるだろう。

Ⅵ章. 総合考察と今後の課題

本研究では、対象者を結婚2年未満の女性ということ以外の条件を問わず、統制を行なわなかったため家族イメージ、自己イメージの変化に関して、個別性の強い結果となった。しかし、協力者各々の家族がその当時に置かれた文脈、家族の歴史とともに、家族成員それぞれと

して、また家族全体として、変化していくそのプロセスをミニチュアと語りの両方から捉えることができたといえる。また特に、自己イメージでは協力者たちが結婚によって大きな変化や揺れを感じており、その様子が協力者それぞれのかたちで表現された。今後、研究目的に応じて、調査対象者の条件を絞ることで協力者間での比較検討も可能となるだろう。

また、原家族から夫婦に持ち込まれるものに関しては、これまで主として多世代家族療法において重要視されてきたものである。先に述べたように、多世代にわたる家族過程の中で伝達されてきた葛藤や人間関係のパターン、心理的遺産、忠誠心、三角関係といったことがパートナーや子どもをどのように認知し、何を期待し、どのような関係を築くか、どのような葛藤や問題を生じるのかに深く関わっている(野末, 2004)と考えられてきた。しかし、そのことに関する具体的な研究はこれまでのところ見受けられなかった。本研究では、親イメージと、自己を受け入れてくれる期待という点に焦点をあて、原家族での体験が夫婦関係にどのようにして影響を及ぼしていると考えられるのか、調査結果から具体例をあげ、明らかにすることができたといえる。

最後にこのミニチュアを用いたジェノグラムという方法について、その語りやすさ、作成することでの気づき、言語化されない表現という利点、可能性を本調査結果からみることができた。今後、多種多様なミニチュアを用意し、守られた環境においてこのミニチュアジェノグラムという方法を用いるができれば、作成者の内的イメージがより豊かに表現されることが期待できる。またそれに従い、より包括的に、家族体験や家族イメージさらには家族の歴史や家族内での人間関係を検討することができるだろう。

引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 (1988). 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究, 家族心理学研究15(2), pp61-74.
- Bowen, M. (1978). Family Therapy in Clinical practice. Jason Aronson.
- Carter B & McGoldrick M (1999). The Expanded Family Life Cycle. Allyn & Bacon.
- Carter, E. A & McGoldrick, M (Eds.)(1980). The Family Life Cycle, Garden-der. Haley, J. 1973 Uncommon Therapy Norton.
- Dunn RT&Schwebel AI (1995). Meta-analytic review of marital therapy outcome research. Journal of Family Psychology 9, pp58-68.
- Eliana Gil (2013). 虐待とトラウマを受けた子どもへの援助 統合的アプローチの実際, 小川裕美子・湯野貴子 (訳), 創元社.
- 伊月知子・赤澤淳子・金井令子 (2003). 結婚前後の生活の変化に対する夫婦の意識 今治明德短期大学研究要30, pp19-29.
- 亀口憲治 (2000). 学校臨床心理学 東京大学出版.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度の関連性——妻はなぜ不満か 心理学研究74 (2), pp122-130.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2011). 人口統計資料集.
- Larsen, A. S. & Olson, D. H. (1989). Predicting marital satisfaction using PR-EPARE. A replication study. Journal of Marital and Family Therapy15, pp311-322.
- 中釜洋子 (2001). いま家族援助が求められるとき, 垣内出版.
- 中釜洋子 (2007). 家族のための心理援助 10 カップルカウンセリング, 臨床心理学7-6, pp819-826.
- 中釜洋子 (2006). 中年期夫婦の臨床問題とその援助, 岡本祐子編, 成人期の危機と心理臨床, ゆまに書房, pp189-214.
- 中釜洋子 (2008). 家族への臨床的アプローチ, 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (著), 家族心理学, 有斐閣 pp157-170.
- 中坪太一郎・新谷侑希・坂口健太・塩見亜沙香・亀口憲治 (2006). 家族イメージ法 (FIT) を用いた質的研究法の開発, 東京大学大学院教育学研究科紀要46, pp227-238.
- 布柴靖枝 (2008). 家族を理解するための鍵概念 家族をどう見立てるか, 釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (著), 家族心理学, 有斐閣, pp21-36.
- 野末武義 (2006). Intersystem Modelの活用 カップル (夫婦) の問題への統合的アプローチ, 家族心理学年報24, pp142-159.
- 野末武義 (2004). カップル・セラピー 個人・システム・ジェンダーの統合的理解, 臨床心理学4-5, pp671-674.
- 岡堂哲雄 (1992). 家族心理学入門, 培風館.
- Olson, D. H. (1996). PREPARE/ENRICH Counselors manual: Version 2000. Minneapolis, MN: Life Innovation Inc.
- 大熊保彦 (1992). 家族関係の心理査定, 岡堂哲雄編, 家族心理学入門, 培風館, pp227-241.
- Rhodes, S. L. (1977). A developmental approach to the life cycle of the family. Social work5, pp301-310.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 (2001). 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析, 家族心理学研究15(2), pp141-148.
- 司法統計年報 (2008). 家事編, 最高裁判所事務総局.
- 吉川延代 (2008). プリマリタル・カウンセリングのための結婚レディネス査定に関する基礎的研究, 家族心理学研究22-1, pp1-13.